

師れない勲章

岩崎芳秋著

泰流社

飾れない勲章

発行——昭和五十二年四月三十日

著者——岩崎芳秋

発行者——西村允孝

発行所——泰流社

東京都文京区小日向二一十八—四

電話　〇三（九四七）〇七三〇

振替　東京〇——一六三七六五番

印刷所——誠之印刷株式会社

0095-0045-4447

序

打 木 村 治

小説で五百枚をここまで書けば、一応雄篇を書いたといつてよい。この小説を私は雄篇と思う。力作と雄篇とは、一般に区別されていけないようだが、雄篇の方が一枚格が上と私は思っている。傑作とまではいうべきでないが、佳作といつて済ませたくもない。秀作などとお世辞もいたくない。何んであつてもこれは読ませるのだ——シンガポール爆撃で被弾した飛行機が、コタバル基地に帰る途中、ジャングルの上空でついに不時着する。戦友は死ぬ。主人公谷本は奇蹟の生を背負つて、そこから彼の彷徨がはじまる。問題はその『生』だ。戻つて来た生は、一度は歓喜そのものであつても、やがて生は所詮運命の棲む容器でしかなくなる。果てしない彷徨が、生ほど重く苛酷な荷物はない、ということを押しつける。この奇蹟の生がはたして神の贈物であつたか、悪魔の贈物であつたか、これが作者岩崎芳秋のモチーフであつたと私は読んだ。更に作者は、神と悪魔を超えて——愛——わが胸の愛と真実を以つて奇蹟の生に応えることの追求に、一

巻の情熱をかけた。故里に待つ妻郁子の許へ、その愛とすでに腐肉となった赤はだかの真実とを持ち帰らせた。真実が如何に残酷であろうと、人生の掟にさからう術のないことにこの作者は喰い下がった。

岩崎芳秋君は、敢ていえば小説書きとしてはまだ素人といってよい。小説界では十五年二十年の修業が普通で、そうでないと一般に素人なのだ。岩崎君が素人でないのは歌人としての方で、私の畏友歌人の故石川信夫に師事し、信夫の創立した歌誌「宇宙風」の同人となつてからも古くそれ以前からも作歌していたそうだから、小説とは年期の入りは格段のようだ。歌集も持っている。その『鳥人の歌』は歌壇でも好評だったと聞く。その小説の素人がよくぞこの長編をまとめ上げた、とこれは驚きである。しかも処女作なのだから、この人は余程の人のようだ。真実余程の人かどうかは、この『飾れない勲章』を何倍か上廻る傑作、秀作を見せてもらわぬうちは小説の上では、何んともまだいえぬが、その可能性がだいぶ近いところで顔を見せはじめている。これは書けそうだ、書くぞ、と思う。この『飾れない勲章』に耳をつけると、作者の根性と人柄が心音となつて聞こえてくるからだ。作品から聞こえるこの心音は本物なのだ。

文は人なり、というが、これはまちがいない。岩崎君は、素朴で味のある人だ。何ごとも熱心にやる人だ。誠実で謙虚だ。真面目で人がよくて度胸もあるし、これではいいことなし、ということになるが、私はそう思うからつきあつていて楽しい。ところで問題は、この人柄が文章にそ

つくり顔を出すということだ。芸術的表現、つまり粹をはみ出した一種の離れ業が常識に負けて出渋ることになるということだ。一つには感覚が歌人のせいか、やさしく繊細で言葉選びがまず目立つ。小説ではこれも邪魔になる。小説は濁流だ。無涯無辺の小説の魔性を取り逃がす。折角のフィクションがリアリティから割引きされて損をする。だが、そんな現われ方をする自分の人柄に足を引っぱられながらも、岩崎君はこれを根性で書いた、と私にはいえる。しかし根性は宝だ。たいした根性をこの人は持っているらしい。

作家精神というのが、根性のことだ。作家精神は作家になってからいうことで、その元は何んで鍛えたかだ。貧乏とか不幸とか恋愛とかのほかに、スポーツとか労働とか職業上の忍耐とか、苦しい勉強とか、無駄にならぬ人生は幾通りもあるものだ。

あらためて岩崎君を見てみよう。この人は徹底して鳥人で鍛えた。一九一八年（大正七年）福島県郡山市に生まれた。当時は三春駒で知られた三春町在の高野村で、そこが彼の風土の地である。現在の田村高校の前身である旧制中学を卒業してから海軍に入った。やがて軍艦陸奥の四十三センチ砲の砲員となった。詩人の松村茂平が岩崎君をはじめて私に紹介したとき「この人は日本一のパイロットです」といった。この言葉は今も鮮やかに残っているが、元陸軍航空士官学校の教官であった松村君がいうのだから、私は掛け値なく受けとった。ふと昔の鳥人スミスのことを思ったりしたものだ。岩崎君が鳥人に生涯をかけるに至った飛行機との最初の出逢いは、実に陸

奥艦上に搭載してある飛行機であった、と本人も述懐しているが、その飛行機への異常な興味がやがて陸奥退艦となり、霞ヶ浦航空隊入りとなった。飛行機整備員からパイロットに転進し、宿願を達したのが昭和十五年夏のことである。

とにかく彼は、日支事変には、漢口、江漢に転進して重慶、成都の爆撃に参加した。第二次世界大戦に突入する少し前、彼は海南島からサイゴン北方のツドモー基地に進出していた。昭和十六年十二月八日未明にはシンガポールを、翌九日にはクワンタン飛行場を、そして十日には戦艦と飛行機の決戦といわれたマレー沖海戦に参加した。ツドモー基地からコタバル、クワンタン、カハンと進撃は絶え間がなかった。シンガポール陥落後はペナン島に移った。更にスマトラ最北端のサバンに転出し、印度洋の哨戒任務についた。ついでボルネオ、ジャワと転戦する。更に中部大平洋諸島——ロツト、タラワ、クエジェリン、サイパン、テニアン、グアム、トラック——と、ラバウル・ブカ、ブイン、バラレ、フィリピン、ミンダナオのほか北千島の各基地に進出転戦した。ラバウルでは、三十六機を保有する部隊が、わずか三機となって内地に引き揚げの始末となった。敗戦の色濃くなった昭和二十年一月、彼は台湾の高雄に移動した。そこからフィリピンに飛び、夜陰に乗じてニコルスフィールドやツゲガラオの友軍救出飛行に当たった。そのとき彼は第一航空艦隊司令部付輸送機の機長として特攻下命のため、司令長官大西瀧治郎中将を乗せて特攻前進基地に飛んだ。こうして敗戦を台湾で迎えた。二十一年三月高雄港からLS

T船で復員した。これが彼の戦歴のあらましということである。——彼はたいへん暗い顔をして語った。その顔が私には戦争の悲劇につながってみえた。どだい彼の飛行機への異常な興味というのは、ただ空を飛ぶだけにあったのではなかったか。いうなれば少年が空に憧れるあれに等しいのではなかったか、と私にはそんなふうに思える。戦後航空自衛隊の操縦学校で操縦教官をしたり、海上自衛隊館山航空隊でヘリコプターの操縦を修得し、そこで操縦教官を勤めるようになったり、などというのは、好きこそものの上手なれ、のパターンではなからうか、と思うのである。彼のくれた手紙の片言だが——「……、戦后、飛行への思念止み難く、……」というのがあった。そこから純粹な無邪気さが汲みとれるのである。文学ではまあどうかと思うが、ひょっとすると飛行機の操縦にかけては天才であるかも知れぬ、などと思うのである。

岩崎君は、現在朝日ヘリコプター株式会社で管理職にありながら、やっぱり飛ばすにはおれず今尚飛んでいる。ヘリコプターだけでも七千五百時間を越しているという。飛行機のと合せたら大変な滞空時間となるう。おもしろい話がある——福田赳夫総理は、選挙のあるたび、ヘリコプターによる全国遊説の旅には、岩崎君が機長として操縦桿を握ってくれると安心らしく、だいぶ御縁を重ねたそうである。命を預けるのならこの「天才に」、ということであつても不思議はなさそうだ。

後半、岩崎君の文学から少々逸れて、彼のダイナミックな半面に私が力を入れたのは、そこが

彼の根性の古巣だからである。やがて来る彼の作家精神とつながる、唯ならぬものを見せつけられたからである。うべなるかな『飾れない勲章』の異常なテーマが、マレー半島東海岸のコタパル、クワンタン、カハンあたりを舞台とし、その陰湿凄惨な運命の彷徨がついに祖国に待つ妻の許まで蜿蜒と続くのである。これは根性の成しとげた業であつたと思えぬ。岩崎君はこれを最初に短篇小説として書いて私に見せた。私はこのテーマは長篇になる、長篇にすべきだ、といった。すると彼の根性がこのような雄篇に仕上げた。六年をかけた。文芸同人誌『作家群』に七回ほど連載して好評を得、あとはコッコツと仕上げた。それがこれだ。彼は永遠とは何か、の不易の壁に挑んで、そこでこの長篇小説を終わらせている。

因に岩崎君には、歌集『鳥人の歌』のほか専門書『ヘリコプターと物資輸送』（鳳文書林刊）がある。

飾れない勲章・目次

序

第一章 一

第二章 一九

第三章 一七

あとがき

第一章

一

「アーッ！」と叫ぶ搭乗員のひと声と同時に、ガガアーンという音がして、眼の前が火の海になった。その瞬間だけが谷本の記憶にあった。

あの時、どのようにして操縦席から脱け出したものやら、谷本には全く判らなかった。

今にして思えば、発火することを恐れて、無我夢中で機体から離れたに相違ない。墜落した衝撃で、両翼にあるガソリントankに引火するものと、咄嗟に思った搭乗員の本能的行為であったろう。しかし、ガソリントankが爆発したのは、しばらくたってからだ。爆発の轟音と共に、真黒な煙の底から真紅な炎が見え、それが火柱となって眼の前に仁王立ちし、やがて下火になったとき、谷本は暗いジャングルの中にいることに気がついた。しかも、何時の間にか、生え

繁った太いマングローブの樹間に逃れていたのであった。

谷本と飛行機との距離は、五〇メートルもあったろうか。そのマングローブの幹に隠れながら、彼は飛行帽を外して幹と枝のつけ根に置き、恐る恐る身体の各部をしらべて見た。飛行服がかなり破れてはいたが、それ以外に身体のだこにも異状はなかった。異状がないと知ったとき、彼は俄かに恐怖心におそわれた。それは、あまりにも咄嗟の出来ごとであり、あまりにも大きな変りようであつたからだ。彼は、変りはてたこの様相に、ただおろおろして、垂れ下がった熱帯樹の支柱根の間から顔をのぞかせて、まだ燃えつづける愛機にみとれているのだった。

思えば、マレー沖海戦をはじめ、幾多の攻撃に参加して華々しい戦果をあげた愛機が、このような無惨な姿となつて炎の中に消えようとしているのだ。折りしも、真紅の炎に交つて、青白い炎が未練がましく噴き出してきた。その青白い炎は谷本の胸底を^き剝^はつて永劫不吉な印象を焼きつけた。

彼は、同乗者を殺した、と、したたかに気がついた。青白い炎が、人間の骨格から発生したものの、と一概に決めつけることは出来ないにしても、その炎の色に死を思わせる妖しさが、いなくずまのように彼の脳裡をかすめ去つたからである。

「水越！水越ッ！工藤ッ！岩井ッ！」

次から次と彼は、六名の名前を叫びつづけた。けれども、バリバリッと言う無気味な燃焼音は

一向におさまらず、火炎に消長があつて、またも天を焦さんばかりに燃えあがる。そして、ときおり一切の生物を根こそぎ死滅しつくそうと企むかのように、青白い炎を噴き出している。そのすさまじい火勢に向つて、彼がどのように狂おしく叫ぼうとも、ただ徒らに寂寞感をつのらせるばかりであつた。

それにしても、堂々とした編隊飛行で、このジャングルの上空を南に向つて飛んだのは真昼頃で、それは三時間前のことだ。飛行中、彼が見たこのあたりは、一面に緑色に覆われていて、あたかも絨毯を敷きつめたように見えたのであつた。

ところが、その内部は、想像を遙かに越えた太陽のない別世界で、地上最大の暗室を形成していた。しかも、そこには熱帯植物がわがもの顔にはびこっている。背丈以上もある齒朶類や、縦横に張りめぐらした蔓性植物は、蜘蛛の巣のように広がっていた。グッダペルカの樹や、マングロープなどの支柱根が、天井から垂れ下がっていて彼を取り巻いている。そこからは空の一点も見透すことが出来ない。

彼は、奈落の底にいる思いで、恐怖と孤独におそわれながら、身を震わせて立ちすくんでいた。

やがて彼は、この呪わしい現場から、一刻も早く立ち去ろうと試みた。墜落現場から少しでも遠ざかることは、戦友を殺したといういたたまれぬ責任感からいくらかでも解放されるような気

がしたからである。けれども、愛機がもし全焼していなかったら、彼は無惨な愛機の残骸にすがりついて号泣したに違いない。そしてまた、戦友の遺体に慟哭したことでもあったろう。だが、そうするには全く跡型もなさすぎたのだ。そこで、彼は六感を頼りに東の方向を想定して歩きだした。ジャングルの東側には、白い海岸線が南北に走っているのを機上から見えていたからだ。

それにしても、歩くという言葉はここには通用しなかった。獣のように軀をかがめて、いずれが垂れ根垂れ蔓とも見分け難い樹々の間を這って進むより外はなかった。

△谷本ツ、貴様は全く卑劣な奴だ。大陸にいた当時、そうだ、あれは確かに漢口だった。その頃から、俺たちのペアは何時もしゃなかったか。飲み歩くときも、女遊びをする時も常に一緒に行動したではないか。そして、口癖のように一緒に死のうと誓った筈だ。それなのに貴様はこの約束を破ったではないか。しかも、我々のペアを皆殺しにしたことに、機長としてどう考えているんだ。悔恨の情すら抱かないのか。何んと言う無責任な冷酷な男なんだ▽

這いつくばって、ジャングルの中をかき分けるとき、死んだ戦友から烈しい憤怒の声を谷本は耳にする。その声に、彼は這うのを休んで頭をもたげる。瞬間、眩暈がした。グッダペルカの垂れ下がった支柱根に、したたか頭を打ちつけたのである。彼は、頭を押えながら踞みこんで戦友に詫げるように言った。

△同じ飛行機の乗員であれば、当然、死を共にする覚悟でいた。まして、戦争中のことだ。戦

場で、命をかけて深め合った絆を、どうして断ち切ることが出来よう。この場で、俺が何故それほどまでに罵倒されなければならないんだ。貴様らと一緒に死んでいたら……と、今になって悔いているんだ。この暗いジャングルの中を這いつくばっている俺の姿が判らんのか▽

彼は、こう反問しながら這いつくばっていった。その間じゅう『死ぬ時は一緒だからなあ』と言いつけたことが、彼の頭の中を占領していて離れなかった。

△確かに言いつけた言葉だ。だが、あれは一緒にめぐり合うかも知れない死の恐怖に対して、我々がグループとなつて抵抗する手段にすぎなかったのではなからうか。いや、死に対してグループで抵抗するなんてあるものか。それは、死を怖れる者同士が、お互いに依存し合っている淡い気安めでしかないのだ。人間は、生れ落ちて死にいたるまで、それぞれ違った宿命に左右されるしかないのだ。同じ星の下に生れ合わせた者は、この世に一人もいないのだ▽

彼は、右手でしっかりと、グッダペルカの支柱根を握つて自分に言い聞かせた。そして、△違約したのは貴様たちではないか。俺一人を、こんな所においてきぼりにして極楽浄土にいつてしまったではないか、結局、淡い約束に執着していた俺こそ馬鹿をみたのだ▽と、谷本は今になって悔いるのだった。

やがて、何時間かかかつて地底を這い廻つた場句に、前方がだんだん明るくなって来るのに気付いた。その明りは、谷本の胸底を照らして勇気づけた。その証拠に、これまでの憤懣と反撥は

一転して優越感に変わっていった。

「もともと、俺は悪運に強い男なんだ。自分の命を他人に委ねるようなことはしない。する必要がない。死は、何時でも、何処でも、好きなように処理出来るんだ。今だって、この苦しみから解放されたいと思う時は、簡単に死ぬことも出来る。拳銃を手放さず持っていたのはこのためだ。だが、俺はいつでもついている。そうら！眼の前が明るんできたではないか。間もなく、このうっとうしいジャングルともおさらばだ。ジャングルから抜け出すことが出来さえすれば、もうしめたものだ。太陽と白い砂浜と、青い海が俺を待っている。そこに搜索機が飛んできてこの俺を見つけるに相違ない。そのとき、俺は飛行帽を高く高く振ってやろう」と、谷本は明るい表情で自信ありげに言い放った。そして彼は、戦友の死に冷酷な眼を投げかけてはくそ笑んだ。

何時間か這い廻った揚句、彼はようやく明るい所に辿りついた。そこは湿地帯で、密生した蔓草や木性齒菜類が、半ば腐って倒れている。彼は、黒みがかったあおみどろの水に露出しているそれらの上に足を乗せて渡りかけた。が、うまく足を乗せることが出来ても、飛行靴の半分は水に浸った。もし、足が滑ったら、底なし沼に全身引きずり込まれそうだ。彼は、垂れ下がった樹々の根に掴まって、一步でも多くより明るい所へ向って進もうとした。

足もとには、黒ずんだ水が濃緑の蔓草の間に見え、そこにはグロテスクな爬虫類の頭部に似た塊が浮いて見える。その塊に足を乗せることは危険だ。塊はゆっくり動いている。それは爬虫類

に間違ひなく、今にも頭をもたげて、口元から血の色をした鋭い舌が稲妻のようにひらめくに相違ない。見つめれば見つめるほど恐ろしくなる。眼を外らして、垂れ下った支柱根にしっかりと掴まることだけが救いだつた。しっかりと掴まることだけが、恐怖と孤独から逃れる唯一の行為だつた。掴まることで、身を浮かせるようにしながら、不気味な塊を一つ一つ越える外はなかつた。

数え切れぬほど塊を越えた、と意識した。そのとき、急に腰が痛み出し、両脚が棒のように突っ張ってきた。両腕の力が脱けてしまったようでもある。彼は、いま渡ってきたところを振り返って見た。僅かに二十メートルほどしか進んでいない。前進しようとする意識と労苦だけが増して、その距離はあまりにも短かつた。彼は、がっくり肩を落として支柱根にもたれかつた。疲労もさることながら、遅々として進めないもどかしさは、いたずらに孤独感を煽るだけだ。肉体の限界を予知させた。

明るみの場所は、直経百メートルほどあり、その周囲は覆い被さつた樹木の闇の世界である。その暗がりには寧猛な野獣がひそんでいて、人間の匂いを嗅ぎつけて今にも飛び出してきそうだ。耳をすますと、闇の中から獣の低い唸り声が聞えてくる。どこからと言うのではなく、その声は、彼をとり巻くすべての方向から地鳴りのように襲ってくる。それに加えて、獣の唸り声よりも低く、彼の耳元には不思議な叫び声がまつわりついて離れない。それは、数時間前に死んだ戦友のうめき声でもあろうか。「谷本！ ああ！ 谷本！……」と、その声は地底の果てから湧